

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

内藤 純行

主論文の題目
および

掲載誌・審査委員

題目 大都市圏型地域における地理情報システムを用いた医療・介護の将来像に関する研究 ～ 神奈川県をモデルとして ～

掲載誌 日本病院総合診療医学会雑誌 2017; 11: 28-40

主査 高田 礼子

副査 平 泰彦

副査 信岡 祐彦

[論文の要旨・価値]

わが国の大都市圏では、2040 年に向けて総人口は増加し、高齢化率も著しく高くなるため、将来に向けた医療・介護資源の整備が求められているが、整備目標の根拠となる、地域別の在宅医療、介護資源を含めた医療・介護資源の需給バランスの将来予測に関する評価が十分ではない。そこで、大都市圏型人口推移を示す神奈川県をモデルとして、県内の将来推計人口、医療機関・介護施設情報等を用いて、75 歳以上人口に対する医師数および病床数の充足度、利用者数に対する訪問看護ステーション（以下、訪看 St.）数の充足度、居住系サービス（サービス付き高齢者向け住宅等）定員および介護施設定員の充足度を算出した。各観察項目について、2015 年の神奈川県内の中央値を基準とした場合の各二次医療圏および市区町村での 2040 年における資源の多寡を評価して、地理情報システム（Geographic Information System: GIS）を用いて可視化した。さらに、2040 年における訪看 St.、介護施設・居住系サービスの不足量も推計した。なお、本研究は聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会（第 3137 号）の承認を受けて実施した。

その結果、2040 年での医療・介護の各資源は 2015 年の水準と比較して不足し、さらに地域における不足の程度に格差があることが示された。二次医療圏別の評価では、75 歳以上人口の増加が著しい横浜北部、川崎北部では、病床数、訪看 St.、介護施設、居住系サービスの不足幅が大きかった。とくに横浜北部の 2040 年での病床数の充足度は 2015 年の神奈川県内中央値を 1 とした場合に 0.44 であり、川崎北部の 2040 年での訪看 St. の充足度は 0.40 と低かった。一方、75 歳以上人口が早期に減少傾向となる横須賀・三浦、県西においては、2040 年での各資源の不足幅は小さく、訪看 St. の充足度は 2015 年の神奈川県内水準が維持されていた。なお、市町村別の評価で認められた医療・介護の各資源の格差は二次医療圏単位で評価すると改善される傾向がみられた。さらに、2040 年における訪看 St. 数は現状と比較して 1.57 倍必要であり、横浜北部では 95 施設が不足すると推計された。また、2040 年における介護施設と居住系サービスの不足率は現状と比較してそれぞれ 1.5 倍、1.3 倍であり、とくに横浜北部、川崎北部の介護施設の不足率は 1.8 倍と大きいことが推計され、大都市圏における在宅医療・介護サービスの資源整備の必要性があらためて示された。

本研究は、地域における医療・介護・居住系サービスの将来の需給バランスを的確に把握する基盤となるモデルを構築し、地域医療・介護に携わる多職種間での情報共有や地域課題解決において有用であることから、今後の地域医療等の施策を検討する上で価値の高い論文であると判断された。

[審査概要]

審査は平成 29 年 2 月 16 日に主査、副査 2 名、指導教授および 2 名の陪席のもと行われた。PC による約 20 分間のプレゼンテーションの後、質疑応答が行われた。審査のなかで、GIS ソフトの特色と医療分野における応用性、病院・医療系資源の充足度に関する指標の妥当性、二次医療圏レベルと市区町村レベルでの差異、今後の研究の展望等について質問があり、申請者は概ね適切な回答をしていた。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]

上記の研究発表および質疑応答から、申請者は当該研究領域に関する専門的知識を有し、十分な研究能力および研究発表能力があると判断した。英語読解力は英文論文の一部を指定し、その場での和訳により十分な読解力があると判断した。また、審査では常に真摯な態度で、礼儀正しく、学位授与に値する人物であると評価した。